

幼稚園雜草の後に

倉橋惣三

幼稚園雜草を手にして、私はいろ／＼の追憶にふける。お茶の水幼稚園に於ける古い思ひ出が、湧くやうに胸にせまる。その永い間、親しい交誼を受けた先輩、同僚の諸君が、なつかしい記憶に浮ぶ。なかにも、共に遊んで呉れた多くの子ども達の顔が、にこやかな笑顔の波の中に浮びあがつて来る。——私にとつて、幼児教育の師は澤山ある。しかし、最も大切な、最も眞實なことを教へて呉れたのは、此の多くの幼児達であつた。私は幼稚園雜草の巻頭に「此の書を、私といつしよに遊んで呉れた幼児達に献ぐ」と前書きし度いと思つた位である。

此の書の中に収めた各篇は、やゝ長いものから

七〇

極く短い感想に至るまで、その時／＼の濃い心持ちを伴はぬものはない。人に結びつき、場所に結びつき、時に結びつき、何故斯ういふものを書いたかといふ、其の時々の感じの伴はぬものはない。嬉しくて書いたものもある。憂へて書いたものもある。悲んで書いたものもある。空想の夢に浮かれて書いたものもある。——私には感情なしには何も書けない。殊に、此の書の中のもの、皆感情の文字である。

幼児教育の理論的著述や、實際的著述も、いつかは書かなければならぬ義務があるとも思つてゐる。しかし、此の書ほど、幼児教育に關する私の心持ちのあらはれたものは、更めて筆を執つても、恐らく書けまい。——私は、此の書を世に問ふ程の自信もなく、又そんな氣もしないが、私の友人には皆読んで貰ひたい氣がして居る。